

ソシュールのアナグラム再考

——詩とシーニュ——

岡 村 民 夫

1

ふつう「アナグラム」とは、ある語句を構成する文字を並べ換えて別の語句を構成することだが、フェルディナン・ド・ソシュールが「アナグラム」（あるいは「アナフォニー」「イボグラム」「パラグラム」「シラボグラム」……）と呼んだものは、そうした文字の遊戯とまったくと言っていいほど異なっている。問題となるのは、「主題語 (mot-thème)」と特定の固有名詞の音的諸要素がテキストのなかに反復的に配分されるようにテキストを作成する方法である。「二音 (diphone)」すなわち二つの音韻の連なりが、その音的要素の基本的単位であり、単音や三音は、「二音」を核とするかぎりで要素として認められる。また、テキストのうちに、アナグラムの存在の指標として、「主題語」の語頭と語末の音節を両端にもつ「マヌカン (mannequin)」ないし「主座 (locus princeps)」と呼ばれる部分が、たいいてい埋め込まれるとされている。

こうしたアナグラムの法則に基づいて古代ギリシア・ローマの詩人は詩を創っていたのではないか——そう考えて、ソシュールは1906年から印欧古典語文学を精力的に調査していったが、けっきょくアナグラムの実在を確信するにはいたらず、1909年に研究を未発表のまま完全に放棄してしまった。残された膨大な研究ノートの一部が、1964年以降ジャン・スタロバンスキーによる注釈とともに公刊¹⁾されていった結果、この異様なソシュールの仕事は広い関心を集め、今日ではすでに通説と言ってよい見方が形成されてさえている。だが、それにもかかわらず、＜アナグラムとは何か＞と根柢から問うてみる権利が、私たちには依然残されているように思われてならない。アナグラム研究の期間が一般言語学の第一回講義および第二回講義の期間（1907年1月16日－7月3日、1908年11月第一週－1909年6月24日）と大幅に重複するにもかかわらず、管見するかぎ

りでは、ほとんどすべての主要論者が、ニュアンスの違いこそあれ、アナグラムを「ラング」に対立させ、ラングよりも何か根源的かつ動的な言語活動として肯定的に評価するという点において、基本的に一致している²⁾。彼らによれば、線的で単義的な制度化した言葉、「構造」としてラングにたいし、アナグラムは、いまだ制度化していないエネルギーに満ちた言葉、ポリフォニックかつポリセミックな差異の戯れである。そして、しばしばそれは、権利上ラングに先立つ深層の言語活動であり、ラングの抑圧的秩序を侵犯するとされ、フロイト的な意味での「無意識」の言語活動に引きつけられる。しかし、概してこの種のアナグラム論は、ソシュールのアナグラム研究の実態をあらためて検討することなく、「構造」を批判する持論の補強にアナグラムを援用しているにとどまる。そこでアナグラムは、ラングの対立原理として過度に一般化されてしまっている。彼らの議論は、構造主義がすでにドミナントな知となっていた 1960 年代半ば以降におけるパラダイム、ソシュールのあずかり知らぬポスト構造主義的なパースペクティヴに依存することで、その信憑性を得てきたにすぎず、ソシュールがじっさいにアナグラムとして問題にしているものと直接突き合わせると、意外なほどあっけなく瓦解してしまうのである。

確かに、アナグラムにおいては、通常のディスクールの線の秩序とは別のロジックによる音節の組織が、ディスクールの下に重層的に見出されてはいる。けれども、それらの音節は、「主題語」と呼ばれる記号を構成するかぎりで存在するのであり、その枠を越えて反響が拡がることはない。しかも、「主題語」は、ソシュールじしんが述べているように「テキストのなかに見られる名前とか、全然発話されていなくてもコンテキストによって脳裡に自然に現れる名前」(1907 年 9 月 23 日付アントワース・メイエ宛書簡, CFS21, p.111) なので、アナグラムには語の「圧縮」や「転移」をもたらず抑圧の契機がなく、その解釈は、だれもがふつうに読み取れるテキストの意味を越える体験とはなりえない。たとえば、ヴィーナス (Venus) の力能を称えるルクレチウスの『自然の本性について』(前一世紀)の序詩のうちに、女神のギリシア語名 <Ap(h)rodite> という「主題語」が見出される場合のように (Ms. fr. 3964/22, MSM, p. 79-100)。ソシュールのアナグラムは、多義的であるどころか、恐ろしく一義的なものであり、むしろこのことこそ解明されるべきアナグラムの異様な特質となっているのである。

また、ソシュールじしんが、個々の詩人や作品ごとの偏差・特種性な

どをほとんど問題化することなく、膨大な詩群のなかにほぼ一様なかたちでアナグラムを読み取っている事実も、アナグラムを、支配的な規範を侵犯する果敢な実践や無意識の特異な運動のごとく見なす通説とは相容れないはずであろう。

そしてさらに、私たちは、従来のアナグラム解釈がかかえているソシユール言語学の理解の根幹にかかわる問題を指摘することができる。そもそもラングを抑圧的な「制度」と同一視する前提じたいが、ソシユールのラングの本質を誤解したものと云わざるをえないのだ。

なるほど、ソシユールは、ときに W. ホイットニーに倣うかのように、言語とは「制度」であると言う。しかしそれは、むしろ言語を他の諸制度からの類推によって考える態度を批判し、言語が他のいっさいの制度に還元できない特異な本性をもった「比類ない制度」(Ms. fr. 3951 N10, p.48)³⁾であることを述べるためであり、議論の仮の出発点にすぎない。ソシユールによれば、他の制度は、法律であれ、政治機構、宗教儀式、風習、モードなどであれ、「どれも様々な度合で**自然的関係**、事物間の適合に基づいており、それを究極原理にしている」(ib., p.47)。たとえ、この「自然的関係」が根本的には人間の心的な形成物だとしても、ともかくそれを基準にして、人は制度の適不適を論じ、問題となっている制度を、よりよいと思われる方向へ変えることができる。ところが、言語はそうした「**事物の自然的関係に基づかない**」(ib., p.48)。言語の単位である記号は、「観念と、その観念にたいしていかなる内的な絆も持たない象徴的事象を前提とする」(ib., p.51)。したがって、言語は「人間の理性によってたえず修正できたり指導できたりする規則には含まれない」(ib., p.61)ということになる。すなわち、ラングとは、その下に抑圧されるような何ものをも持つことなく、無基盤に自己発生しつづけている存在なのであり、そこにおいては、抑圧／反抗、束縛／自由、反復／創造、等の対立劇が、はじめから意味をもちえないのだ。ソシユールが一般言語学の超克や自己批判としてアナグラム研究を行ったといった物語、抑圧的な「制度」としてのラングを侵犯する根源的な運動としてアナグラムを探求したといった物語は、かくしてその根拠を失う。

従来のポスト構造主義的なアナグラム観から思い切って身を引き離し、アナグラムがソシユールにとってもっていた意義、アナグラム研究と言語の本性をめぐる思索の関係、アナグラム研究が特異なかたちで中断されるにいたった理由等を、ソシユールの問題構成の力学そのものに即して考察

することが、私たちの野心である。

2

アナグラム研究の動機がラングや一般言語学にたいする批判的反省といふところにはありえないとすると、いったい何がソシュールをこの研究に引きこんだのだろうか。アナグラム研究の始まり方に眼を凝らしてみることから、この問題に取り組んでみよう。研究ノートには日付がないうえに、大半のページは個々のテキストの分析にあてられ、アナグラム一般の意味を語る覚書きはごく僅かにすぎない。この点でもっとも有益な資料は、書簡である。ことに近年公開されたシャルル・パイイ宛書簡群⁴⁾は、アナグラムへの言及を豊富に含んでおり、これまで不明な点の多かったクロノロジーを確定するうえで第一級資料となりえる。

1905年12月から1906年1月にかけてソシュールはイタリアで冬の休暇を過ごしている。ローマから1906年1月10日付でアントワヌ・メイエ宛に書かれている書簡によれば、この頃からソシュールはラテン古詩の詩法研究にとりかかったと推定される——「フォロ・ロマーノにあるアルカイックな碑文は、頭の体操をする欲求 (*le besoin de me casser la tête*) を感じるとき、絶好の慰みです。もちろん、そこから引き出せるものは何もありませんが、謎めいた領域を沈黙思考し、「自分の眼で」解説を確かめるのは楽しいことです。この解説は、得られたはずの確実さをもっては、まだどこでもなしとげられていないように私には思えます」(CFS21, p. 106)。この書簡からは研究対象が特定できないものの、残されているノートの状況からすると、それがサトゥルヌス詩の詩法であったことは明白である。サトゥルヌス詩とは、文字として残されているラテン詩の最古の形態（前三世紀）であり、すでにウエルギリウスの頃（前一世紀）には規則を欠いた奇妙なものと思われていた。近代の専門家のあいだでもその詩法にかんして確固たる説はなかったが、それでも、緩やかなアリテラシオン（同一子音の反復、とくに語頭の子音の反復）に従っているとするのが一般的な解釈であった⁵⁾。ソシュールは、サトゥルヌス詩のなかに、より厳密な規則が潜んでいるのではないかという期待を抱いて、その研究に着手しているのである。おそらくここには、ローマに滞在し時間を持て余していたという状況以外に、ソシュールの師であり友人でもある文献学者ルイ・アヴェ (1849-1925) がサトゥルヌス詩の高名な研究者であったことも囁んでいよう⁶⁾。ともかく、ソシュールのラテン古詩の研究が、ラ

テン語体系を考えるという言語学的関心からでも、内容に関わる文学的関心からでもなく、真の詩的構成原理の抽出という関心から始められていたことがわかる。ただし、ソシュールは、いきなりサトゥルヌス詩のなかに隠された語を読み取ろうとしたわけではない。彼の詩学的研究の焦点がアナグラムのうえに結ばれるまでには、相当のプロセスがあったのである。

バイイに出された1906年7月5日付の手紙で、彼は「サトゥルヌス詩をあらゆる角度から検討したあげく、あなたが知れば、たぶん満足するだろう解決に到達しました」(CFS44, 1990-1991, p. 43)と書いているが、その解決とは、サトゥルヌス詩を、ギリシア叙事詩の六脚詩句の、様々な「破格 (licences)」をともなった採用と見なすことであって、まだアナグラムの着想からはほど遠い。ソシュールがここで提示しているのは、「韻律」という、あくまで詩学の既知の地平における新説にすぎない。ソシュールは、自分の解釈に充分満足しておらず、べつの角度から検討を続けていた。このことは、さらに決定的な考えに到達したことを興奮した口調で語る、1906年7月17日付のバイイ宛書簡を読むとわかる。

あなたがこの前の私の手紙にかんしてしてくださった非常に正当な意見に答えるまえに、私があらゆる戦線で勝利を得ているということをお知らせします。私はどこから攻めたらいいのか余りわからぬまま、二か月のあいだサトゥルヌス詩を巡って考えてきましたが、二日前以来この戦闘は終わっています。敵は完全に敗走してしまいました。(ib., p. 45)

この書簡は、現在までのところ、「アナグラム」への言及が最初に現れる書簡である。しかし、ここで「勝利」と呼ばれているのは、アナグラムの＜発見＞ではなく、「詩句のなかに同一の子音は偶数個存在しなければならない」という法則と、「同じ法則が(…)母音にも有効である」(ib., p. 46)ということ、すなわちソシュールが後に「クープレゾン (couplaison, 対化)」と名づける法則 (Ms. fr. 3963/5, p.3, MSM, p. 33) の＜発見＞にはかならない。ソシュールがアナグラムについて触れるのは、音韻の偶数回の反復をさんざん検討したあと、いったん横線を引いて区切りをつけた書簡の末尾においてなのだ。アナグラムとクープレゾンの関係を考える前に、クープレゾンの出現がソシュールにとってどのような意義をもっていたのかを押さえておく必要がある。

ソシュールがクープレゾンの考えにいたるきっかけは、「なんとしてもアリテラシオンの問題を解決しなくてはならない。」(ib.) と思ったからであった。アリテラシオンと通常呼ばれているものが、語頭の音節における子音の反復であるのにたいし、サトゥルヌス詩では、語頭以外の音節においても反復が目立つという点が、ソシュールの探究心を刺激したのである。したがって、この探求もやはり伝統的な詩学の地平から出発していたと言える。けれども、クープレゾンの法則へいたった瞬間、ソシュールは、この地平から一気に離脱しており、彼の興奮はここから来る。彼がおのれの飛躍を感じていたことは、書簡の次のような文面に明かだ。

1. ひとがこれまで「アリテラシオン」として受け止めてきたものは、サトゥルヌス詩にとって、あるはるかに全体的な現象の、まったく取るにたらない一部です。しかも、この問題となる現象が、二つの語頭に当たり、こうした明確な場所を叩き、ゲルマン語詩のアリテラシオンの法則に類似した、あるいはさらに緩やかですらある法則へ限定されているように見えたのは、ほとんど偶然の状況によるだけなのです。というのも、

2. サトゥルヌス詩のすべての音節がアリテラシオンに含まれているからです。しかも、すべての音節は、通常の意味における「アリテラシオン」という観念から引き離さなければならないような正確な作文のために完璧に定められた法則にしたがって、そこに含まれているのです。(ib., p. 46)

アリテラシオンが、詩句を構成している音節のごく一部分にしか直接的に作用しないのにたいし、クープレゾンの法則は、それが実在するとすれば、詩句の音節全部に及び、一切の音韻が対等な資格で詩の形成に参加することになる。ロベール・ゴデルによって「ホメロスのアナグラム」という呼称のもとに分類されている表紙を欠いたノート (Ms. fr. 3965/5, p.6, MSM, p.35) によれば、これは、アリテラシオンばかりでなく「脚韻」と比較しても、クープレゾンの法則が「全体的」である理由である。

そして、ソシュールの詩学的研究と一般言語学との関連を考えるうえで注目すべきことは、クープレゾンの法則の全体性・特異性が、詩人たちの「語の音的分析」「語の音声的形態にかんする学識」(ib., p.7, MSM, p. 36) にの成果として理解されている点であろう。ソシュールがクープレゾ

ンの法則に印欧古詩の「優越性」(ib.)を認めたのは、詩句に動員されるすべて「語」=シーニュの、すべてシニフィアンにたいする見事な音韻論的分析に基づいた詩法が問題になっていると思われたからにほかならない。したがって、クープレゾンの<発見>は、ソシユールにとり、既知の<韻律の詩学>から未知の<シーニュの詩学>への飛躍に相当していたと言えることができる。

3

クープレゾンの<発見>を報告する7月17日の段階で、すでにソシユールはアナグラムをも<発見>しており、しかも両者の共存を語っている⁷⁾。アナグラムの解説の開始とクープレゾンの解説の開始は、時期的に一致しているのだろうか。ソシユールが「主題語」という用語を特に解説を付すことなく用いている点からすると、これ以前にバイイにたいしアナグラムのことを口頭で何か述べていたと推定される。ただ、そうだとすると、そこから単純にアナグラムにかんする作業の先行性が導き出されるわけではない。「二か月のあいだ」という期間が、音韻の反復数の検討に費やされた期間を意味している可能性が高いからである。今後さらに研究する必要のある問題だが、いずれにせよ、韻律の地平における検討のほうがクープレゾンとアナグラムの登場に先立つことと、両者の登場が大きくずれてはいないということは、ほぼ間違いない。そして周知のとおり、その後、とくにクープレゾンの法則の考えが否定されるわけではないにせよ、ソシユールの関心がアナグラムの方にどんどん傾き、やがて手紙からもノートからもクープレゾンについての言及が完全に消え去ってしまうことになるのだ。こうした展開は、いったい何を意味するのだろうか。クープレゾンの法則をシーニュの詩学としてとらえたことにより、私たちは、クープレゾンとアナグラムの並行性・共存性と、前者から後者への力点の移動を、等しく理解することができよう。

次に挙げるのは、研究の焦点がすっかりアナグラムに移った段階で、ソシユールじしんがアナグラムをどのようなものと見なして探究しているのかを語っている貴重な覚書きのひとつであるが、その表現が、クープレゾンを価値づけていた際の表現にきわめて類似している点に注目したい。

韻律という条件よりもはるかに、詩人が選択しえる語の表現や組み合わせ全体を、あらかじめこうした法則 (= アナグラムの法則, 引

用者注)が支配している。これは存在すれば宿命的に(…)その効力から逃れることができない基盤となって、作者が語をもちいて思考に与える形態をほとんどすべてのパッセージにわたって決定することになる。(fr. 3966/5, p. 40-41, MSM, p. 134)

ソシュールは、アナグラムもクープレゾンも、ラングにたいする侵犯やラングからの逸脱としてではなく、印欧語古詩における根本的な規則、個々の詩人の意思、個性、才能、あるいは流派やジャンルなども越えた絶対的な規則によるものとして読んでいた。しかもソシュールにとり、アナグラムの法則がその資格をそなえているのは、クープレゾンと同様、それが、テキストを形成する「語」の全体に関与する点において「韻律」の部分性・相対性を越える、全体的な法則であると思われたからである。つまり、アナグラムとクープレゾンは<シーニュの詩学>の圏域において兄弟のように共存しているのである。

ただし、研究の焦点がクープレゾンからアナグラムに変わったことを、たんに同じ平面における移動のようなものと見なすとすれば、いきすぎである。両者のあいだには、「意味」をめぐる重要な相違があり、この変化は、深化・進展を含んだ不可逆的变化であったと言うべきだろう。

アナグラム詩をつくるためには、詩人は、まず自分が歌うべき「主題」にしたがって「主題語」を定めなければならない。クープレゾンの法則においては語のシニフィアン¹の分析だけが詩作の問題となっていたのにたいし、アナグラムの法則においては、それに加えて、「主題語」のシニフィエ²が問題となるにいたっているのだ。前章で言及した表紙なしのノートに記されている「語の音的実体を(それから聴覚的な系を作るためであれ、特定の名前を暗示して意味にかんする系を作るためであれ)分析する印欧詩」(Ms. fr. 3963/5, MSM, p. 39)という表現は、アナグラムがシニフィアンとシニフィエの次元に関わるものであることを、ソシュールが比較的早い段階で自覚していたことを教えてくれる。いまや私たちは、アナグラム研究を一般言語学と結びつける決定的な接点を前にしているのである。

ソシュールは、時期がアナグラム研究と重複する「一般言語学」の第二回講義の序説(1906年11月16日)において、つぎのようにシーニュの二重性を強調している。

思考にたいするシーニュのこうした関係こそ、まさにシーニュとい

うものである。つまりシーニュは、音節のひと連なりなどではなく、ある特定の意義がそこに結びつけられるかぎりでの、音節のひと連なりによって構成されている、**二重の存在**なのである。

シーニュは二重である。

意義
音節

(CFS15, 1957, p. 24)

ここで意図的に素朴に「意義」と「音節」と呼ばれているのは、言うまでもなく、べつのところでは「観念」と「聴覚映像」ないし「聴覚印象」と呼ばれ、さらにその後、相互の結合の不可分性と特異性を表現するために、「シニフィエ」と「シニフィアン」と命名されるものである。ソシュール以後の構造言語学において音韻論が特権的な主要業績となったことからしばしば忘れられがちな点だが、ソシュールにとって、シニフィエから分離されたシニフィアンは、もはやシニフィアンではない。シーニュの双面性ということは、ソシュール言語学を理解するうえでこのうえなく重要であり、ラングの定義に直結している。シーニュの集合が自律的で中性的な体系としてのラングを形成しているという考えは、シーニュにおいてシニフィアンがつねにシニフィエという内容面での半身をともなっているという考えと原理的に不可分である。そうした半身をもつからこそ、シニフィアンは、言語的事象において、他のシニフィアン以外のいかなる外部にも依存しないことができる。シーニュは、展開・表出される思考とは本質的にべつの次元に、シニフィエという意味をもつことによってのみ、発声ともなう生理的活動としてのパロールからばかりでなく、発話を通じて表出される精神活動としてのパロールからも絶対的に分離されるのである。

なお以上の点から、構造主義の「構造」とソシュールのラングとの違いが、いっそう明白になる。構造主義者は、その当初の段階において、意味の単位とは一致していない「音韻」や「音素」の相互関係を特権的な研究対象とした。彼らは、それがソシュールの「体系」の概念の応用であり、厳密化・徹底化であると信じこんだが、シニフィエから引き離された「シニフィアン」は、もはやソシュールの「シニフィアン」と根本的にべつのものである。じっさい、空虚になった「シニフィアン」は、自律していることができず、自己の外部に依存するかたちでしか想像しえぬものとなる

う。ここに成立するのが、「構造」が無定形な「実質」を切り分けることにより意味が形成されるという周知の図式である。そして、この切り分け図式は、切り分けに先立つ「実質」を想定しているがゆえに、その「実質」を、構造化によって抑圧される深層のカオス、構造を侵犯してやまぬ無意識の力と見なす図式、すなわちアナグラムにかんする諸論者が共有してきた図式へ、容易に転化することにもなるのではないか。

さて、話をクーブレゾンからアナグラムへの焦点の推移へ戻すならば、この推移は、詩の基礎として間接的にしかシーニュを問題としない段階から、「主題語」というかたちで直接かつ全面的に「二重の存在」としてのシーニュを問題とする段階への進展として、すなわち＜シーニュの詩学＞の徹底化として理解できるだろう。テキストのなかでアナグラムの法則が直接的に作用する音節は、主題語のシニフィアンを構成する音節のみとなるので、クーブレゾンの法則の場合と比べると著しく減少する。しかしソシュールは、このことを詩法の全体性の縮減とは受けとめなかったに違いない。クーブレゾンの法則は、なるほどテキストを構成する全音韻に直接働きかけるが、各種の音韻数を偶数にするという規定じたいは、音韻の配列には直接関与せず、ディスクールの意味の特定にも関わっていない。そこには音韻の種類ごとの数を偶数にすることと、有意味な韻文を形成することという、相互には何の内的な繋がりもない二系列の課題があり、その課題を矛盾なくこなすことが詩人に要請されているにすぎない。これにたいし、アナグラムの法則は、直接に作用する音韻の量がたとえわずかであろうと、テキストをなす語の連なりの意味と形式に同時に関わる。アナグラムを構成することは、テキストのシーニュ全体の連辞を、主題語のシニフィアンとシニフィエによって内的に規定し、テキストに内的で潜在的な焦点を与えるということである。「たった一語でさえ変えたり動かしたりすれば、ほとんどの場合、アナグラムに関する事柄に必要ないろいろな組み合わせを害さざるをえなくなる」といったシステム」(Ms. fr. 3963/1, p.1, MSM, p. 30) とソシュールが言っているのは、アナグラムのこの側面を指したものと考えられる。クーブレゾンからアナグラムへの移行とは、志向される「全体的な現象」が、二元的法則（音韻上の規制と意味上の規制）によるものから、この二元性を＜シーニュ＞を核として束ね、統一する一元的法則へ進展することなのである。この点において、ソシュールにとりアナグラムは、古典的な韻律はもとより、クーブレゾンよりも「全体的な現象」として現れたと考えられるのである。

これはべつに、アナグラム詩（の法則）が、ラングとかラングに準じた記号学的体系に相当するということではない。詩であろうとなかろうと、あらゆるディスクールは、ラングという潜在的体系のうちに存在するシーニュの限定＝顕在化をへて実現する。この過程に特権的なシーニュの選定と分配をとおして介入し、それを二重化する「システム」が、アナグラムの法則である。

かくして、私たちはアナグラムの実在性の問題を度外視したかぎりではあるが、とりあえずアナグラム研究と一般言語学との関係を、対立とも、たんなる同一性とも異なったものとして素描しておくことができよう。ソシュールが詩法にかんする研究を始めたのは、ラングの性質を探究するためでも、ラングと詩の関係を考えるためでも、ましてやラング以前の深層なるものを探るためでもなかった。歴史的・文化的に限定された詩の構成法を解明しようとしてである。しかも、その当初、ソシュールはこの作業をヴァカンスの無聊を慰める気晴らし程度にしか考えていなかったらしい。だが、数か月で彼の思考は目の前の詩句を潜在的なシーニュに関連づけ、ラングと詩的ディスクールという、水準を異にした二つの次元に積極的に関与し組織するシステムを構想する方向へ進んだ。おそらくこれは、一般言語学の＜応用＞といった自覚的实践ではなく、そうしたものに先立つ彼の思考の宿命的な傾き、言語の潜在性へ下降する傾きに沿った過程だったのである。研究の焦点がクープレゾンからアナグラムへ比較的短期間のうちに移り、以後、ソシュールが約三年近くもアナグラムの解説に没頭するという事実を、それ以外の観点から説明することは極めて困難である。

4

アナグラムの実在性にたいするソシュールの懐疑が始まるのは、研究の末期になってからではなく、かなり早い時点からである⁸⁾。疑念を払い除けられず、ソシュールが研究を断念するにいたったのは何故か。丸山圭三郎は、ソシュールがいまだ意識的な主体という概念に囚われていて、無意識的な主体という概念を所有していなかったからであるとしている。つまり「自覚せざる精神分析学者ソシュール」⁹⁾は、無意識的言語活動としてのアナグラムの存在を直感しながら、みずからの画期的で今日的な発見を、意識的行為かさもななくば偶然かという、古典的な二者択一の枠組によってしか評価できなかったというわけである。だが、テキストとラングとの関係を強化する詩学をソシュールが思考していたとすると、こうした解

釈はもはや受け容れがたい。では、やはりアナグラムは、ソシュールの仮説したとおり、詩人による意識的な手法なのだろうか。私たちはここでも、ソシュールじしんのアナグラム研究の展開を注視し、そこにおける問題構成のありようを浮かび上がらせることにより、新たな解釈を提出したい。

アナグラムが自己の「幻影 (fantasmagorie)」(1908 年 8 月 28 日付レオボルド・ゴーチエ宛書簡, MSM, p. 138) ではないかという疑念にたいするソシュールの対処の仕方は、およそふたつの面に分けられる。一方は、外的かつ直接的な証明の努力である。ソシュールは、詩作品の外へ、古代のレトリックや詩学にかんする文献のなかに、アナグラムへの言及を探す。他方は、内的かつ間接的な証明の努力である。ソシュールは、より多くの多様な文学テキストのなかに、より多量で、より高密度なアナグラムの実例を探し求める。

この二様の探求は、特に先行後行関係をなすことなく、並行して相補的なものとして遂行されている。そして、外的証言がなにひとつ見つからないのにたいして、アナグラムを含むと思われるテキストの範囲やアナグラムの量は、急速に増大していった。スタロバンスキーがアナグラムの「増殖」と呼んでいる現象である (MSM, p. 109-120)。アナグラムが読み取れるテキストは、サトゥルヌス詩群をすぐに越え、サンスクリット語で記された古代インドのヴェーダ詩篇や、古代ギリシアのホメロスの叙事詩へ広がる。またラテン語の世界でも、古典期やヘレニズム期の諸作家の各種の韻文へ、書簡といった散文へと広がった。そして最後には、ルネッサンス期のラテン詩 (Ms. fr. 3967) から、19 世紀初頭のイギリス人トーマス・ジョンソンによる、古代ギリシア詩のラテン語訳や、アナグラム研究期にまだ存命だった同世代のイタリア人ジョヴァンニ・パスコリ (1855-1912) によるラテン詩にまで及んだ。ソシュールは、1813 年に出版された、イギリスのイートン・カレッジの文学修士ジョンソンの翻訳詩集のなかに、ラテン語のアナグラムばかりか英語のアナグラムすら解説している。またテキストにおけるアナグラム分布状態もどんどん稠密化し、ジョンソンのある一行、<Duos autem simul pariens hunc> には、ラテン式の彼の名と称号にあたる <THOMAS IOHNSONIUS ARTIUM MACISTER IN USUM SHOLAE ETONENSIS> という八語にもおよぶ「主題語」が、何重にも重なったアナグラムとして読み取られている (Ms. fr. 3968/5, p. 44)。

だがアナグラムの「増殖」も、ソシュールの懸念を払うものでは決し

てなかった。それでは 次のような「解きたい執拗なパラドックス」を解消できないと思われたからである。

(…) イポグラム (=アナグラム, 引用者注) にかんするすべての問題ひとつの疑惑, それも極めて複雑な疑惑にゆだねられていることは確かである。

事象について論議するまえに, 解きたい執拗なパラドックスについて考えてみよう。まずそれらの事象に取り組むものは, 理論上, そして原理上, このパラドックスのなかに投げ込まれる。

ある作品が, 欲しいオモグラム (=アナグラム, 引用者注) を貧しくしか提供しない。——そうすると私たちが錯覚を抱いているということ, ないしテキストがほとんど手渡してくれないものを無理にテキストから引き抜こうとしているということが明らかになる。

(反対に, 引用者注) ある作品が, 欲しいオモグラムを過剰に豊富に提供する。——そうすると私たちが欲しいイポグラムを望むなら, どこであろうとそれを手にいれることができるということ, それが確率の総計による平凡で避けがたいものであるということが明らかとなる。

これらふたとおりの帰結は, 深刻に傾聴し注視すべきものである。けれども, 両者が矛盾しあっているということ, 否定するために相反する論議をつねに経ることを決意する以外, すなわちそれぞれの場合ごとに基準を替える以外には, 否定の方法を構成できないということもわかってしまう。

イポグラムが薄弱すぎると, イポグラムの存在を証明することができなくなる。といって, それがおびただしすぎても, やはりその存在を証明することができなくなってしまうのだ。

(Ms. fr. 3968, MSM, p. 131)

つまりアナグラムが稀少である場合, それが音韻配列の上での偶然である可能性が強まってしまうので, アナグラムを高い頻度で発見する必要がある。ところが, そうなればなるで, 今度は, 作者の意図ではなく, 限られた音韻とシラブルから成る言語の素材上の性質が, 読みたいと思うアナグラムをシニフィアンのマッスから切り抜くことを読み手に許しているのではないかという可能性が広がり, アナグラムがやはり読み手であるソ

シュールの側の錯覚であることになるというわけである。

このパラグラフでソシュールは、アナグラムの〈貧しさ〉による疑念と〈過剰さ〉による疑念を同等な悪循環として語っているが、すでに見たように、彼のアナグラム研究の進展は、アナグラムの〈貧しさ〉から〈過剰さ〉へと向かうものであった。したがって、研究が進むにつれて現実にはソシュールを強く悩ませたのは、アナグラムが豊富に解読できるがゆえにアナグラムの実在感が稀薄になるという「パラドックス」であったはずである。内在的にアナグラムを立証しようと努力すればするほど、アナグラムの「増殖」が進行するという事態は、おそらく余計ソシュールの疑念を深めたことだろう。上に引いた手稿が記されたノートはやや後の箇所では、ソシュールは自分が陥っている奇妙な状態を、まさに矛盾した記述によって生々しく記している。

イボグラム作家の仕事を子細に検討したなら、作家が作品の端から端まで、ある名からイボグラムを実際に作ろうとしていたのだと完全に納得できる。それどころかその作品が、テミストクレス、カルブルニウス、エパミノondasといったサンボル(=主題語、引用者注)¹⁰⁾の一群を、二度、三度、四度と周期的・規則的に実現させているということを示すことすらできる。ところが、それは、いかに望まれたことであろうと、一般的な確証をなにひとつ与えてくれない。なぜなら、議論の余地なく、こうした音節の連なりが偶然的に生ずることは、さして困難でないからである。(ib.)

ソシュールが直面していた困難は、もはや明らかなように、詩人の意識的行為か偶然かという二者択一の問題ではなく、詩人の意識的行為と偶然とが識別できなくなるという問題であった。これは、アナグラムの内在的証明の進行が、それじたいによって反証を開き、存在証明と反証が決定不能な仕方では反転しあう事態だけに、ソシュールのアナグラム研究にとって「解きたい執拗な」躓きとして現れたはずである。ソシュールのまなざしのまえに、アナグラムは、〈アナグラムは存在するのか〉という問いそのものと化して、とめどなく立ち現れる。ソシュールが、アナグラムの内的証明に挑むあいだも、外的証言を探す作業を怠っていないのは、このパラドックスを斥けるためであったのだろう。だが、繰り返すが、それにもかかわらず証言となる文献は見つからなかった。

「書簡恐怖症 (épisthobie)」(1894 年 1 月 4 日付メイエ宛書簡, CFS21, 1964) を自認する彼が、ジョヴァンニ・パスコリに手紙を書くという賭に出たのは、こうした挙げ句であった。ソシユールは異様な地点へ追い詰められていた。もしかすると、この存命のボローニャ大学の詩人教授のラテン詩のなかにアナグラムを探しはじめる時点で、すでにソシユールのうちに、作者に直接問い合わせるという意図が芽生えていたのかもしれない。ソシユールはパスコリに、まず 1909 年 3 月 19 日付の手紙を書く。この一通目の書簡にたいする詩人教授の返信は、現在のところ発見されていない。しかし、同年 4 月 6 日付のソシユールの手紙の文面に、「お手紙に書かれておられたことから察しますと、どうも単なる偶然の照合であるように思われることを、予め申し上げておきます」とある事実から、彼の期待を裏切るものであったことがわかる。この二通目で、ソシユールは、パスコリじしんの詩を対象とする読解を披露している (CFS24, 1968)。けれども、パスコリの方から返事が返ってくることはなく (レオポルド・ゴーチエの証言に拠る, MSM, p. 151), この論考の冒頭で触れたようにソシユールはアナグラム研究から決定的に身を引いてしまう。ソシユールのアナグラム研究は、確固たる反証や反論によって終止符を打たれたのではない。その種の反証の不在と、証明と識別できないような反証によって、宙吊りとなったまま途絶したのである。

ところで、アナグラムの過剰な豊富さが「偶然の照合」に思えるとは、どういうことだろうか。このことは、少なくとも、詩における語の構成から「偶然」を徹底的に排除するはずだったアナグラムの規則が、期待に反して寛容で拘束力の弱いものであったということを意味していよう。

確かに、アナグラムは、主題語へ送付される音的要素の線状性を、ある程度要請している。けれども、「二音」をその基本的な単位とすることは、最小の度合の制約としかならない。そのうえ、補足的に単音を勘定にに入れることや、要素の部分的省略、要素間の倒置が認められていた。各要素の個数にも、要素間の距離にも特に規定はなかった。また、「マヌカン」の画定にかんしても、ディスクールの有意的分節と特に関連づけられてはいなかった (例えば、「マヌカン」が文の途中から始まり、次の文の途中、ときには一語の途中で終わったりすることも認められている)。じっさい、このような低い度合の制約のもとでは、極めて限られた数の音韻の繰り返しからなる「語られるかたまり」から、読者が読みたい音節を一方的に読み取ることは、かなり容易な作業になりえよう。音節の配分にかんする規

則をもっと複雑かつ厳格なものに設定すれば、「偶然」の余地は縮小し、アナグラムの現実性はたかまる。だが、そのぶんアナグラムの数も激減し、アナグラムを一般的な法則とすることができなくなるだろう。一般性は規則の緩さに比例している。つまり、ソシュールのアナグラムのなかには、はじめから確率論上の陥穽が潜んでいたのだ。

アナグラムは無意識の奏でるポリフォニーではないし、詩人の意図的詩法であることも限りなく疑わしい。ソシュールのアナグラム研究は、外的な制約によってではなく、アナグラムじたいが内的にはらんでいた問題の露呈によって途絶しているのである。アナグラムの実在を疑う余地が依然として残っているという単純な事実を銘記したうえで、私たちは、この問題の解決する方向ではなく、問題がソシュールの思考のどのような場所に開かれているのかを見る方向へと進みたい。したがって、問われるべきは、ソシュールが詩の言葉にとって緩い制約を非常に厳密な規則であるかのように考えたのは何故か、また何故もっと制限力をもった規則を構想し（え）なかったのか、ということとなる。そしてこれを考えるうえで、忘れてならない与件は、やはりアナグラムが実現された詩の言葉を潜在的なシーニュと結びつけるシステムとして構想されていたということだ。この原点を看過すると、ソシュールのアナグラム研究の挫折は、とたんに出来事の特異性を喪失し、確率、空想、解釈主体と解釈対象の相対性等をめぐる、一般的で凡庸な問題へ転落してしまうことになる。

5

通常、文学テキストにおいて何であれ形式の読み取りが実在感をもつとすれば、それはその形式が、たんに偶然から遠い秩序を実現するからではなく、表現ないし享受の水準において何らかの効果に関与するからである。アナグラムに根柢的に欠落しているのは、こうした水準における意義である。ソシュールには、名前がアナグラム化される理由がどうしても理解できなかった。彼は、アナグラムに言及する文献が見つからない理由として、宗教的な禁忌を想像する一方、世俗的なテキストにまでアナグラムが読み取れることを、当初の意義が忘却され、アナグラムの作成が純粹に形式的な伝統墨守へ変化したことによると解釈しようと試みている。だが、こうした説明は、かえって世俗化以後もアナグラムの言及が見られないのは何故かという新たな問題を生み出してしまえばかりでなく、むしろアナグラムの存在にかんする問いが生まれた以後の事後的で二次的な思考に属

していよう。注目すべきは、彼がアナグラムを着想するさいに、「作者が語を用いて思考に与える形態をほとんどすべてのパッセージにわたって決定する」ということ以外、その存在意義を問題としていないという異様な事実の方である。

アナグラムの実現は、リズムの表現や享受に関係しない。確かに、アナグラムをめぐりテキスト中に同音がそれなりの密度で分布していることは、しばしば存在する。しかし、主題語の音的要素の再現を本質的な目的とするアナグラムは、その規則において同音の稠密な反復を必ずしも要求していないし、ましてや、それら相互のリズミカルな配分を要求していない。仮にアナグラムとリズムが重なる場合があったとしても、それは付随的・偶有的現象でなければならない。さもないと、アナグラムが様々な「音的調和」(Ms. fr. 3963/5, p.1-2, MSM, p. 27)と同質の「装飾」に陥ってしまいかねないからである。すでに確認したように、ソシユールにとって、アナグラムの魅力は、それが<韻律の詩学>とは別の次元に据えられていることにこそあった(したがって、アナグラムが韻文の境界を越えて拡大したことは、必然的展開であったと言わなければならない)。しかし、アナグラムがリズムの生産を目的としていないことは確実に、アナグラムの実在性を稀薄化するとともに、アナグラムの規則をより濃密なものにする契機を予めソシユールから奪っている。

同様の事態は、いわゆる内容の側面においても指摘することができる。主題語をテキストのうちに解説する行為は、主題語に選ばれる固有名詞の性質上、テキストの読みに何ら新しい意味を付け加えない。これがもし新たな意味の生産に寄与するものだったならば、アナグラムの実在性はもっと高まっていたはずである。たとえば、スタロバンスキーが、ソシユールのアナグラムの応用であるかのごとく披露している、ボードレールの「老いたる大道芸人」やヴァレリーの「海辺の墓地」の読みは、そうしたものにほかならない。スタロバンスキーは「海辺の墓地」の一節、

La mer, la mer toujours recommencée !

O récompense après une pensée

のうちに <recommencée> のアナグラムを読み取っている (MSM, p. 158)。引用箇所第二行目の <récompense> の <recom-> と <-ense>, および <pensée> の <-ensée> が <recommencée> を再現しているというわけで

ある。この読みがそれなりにもっともらしく感じられるのは、これが本当は「ソシュールのアナグラム」ではないからだ。主題語の再現に関与している部分は、その音韻を三つ、あるいは四つも含むばかりか、その順序は単純に線的である。主題語は固有名詞ではなく、形容詞である。しかも、この限らない海の波の運動を表現する「再開された」という意味の語は、アナグラムによるこの語の再開そのものにより、<récompense（報い）> や <pensée（思考）> という語の意味と反響しあい、ソシュールのアナグラムには見出しがたい多義的でメタフォリカルな意味を産出している。

秘密の解読は、言説の意味作用に付加価値を与えるならば、作者の承認がなくとも何らかの相対的なリアリティーを得ることができる。精神分析が解読する無意識の言葉や、主題批評が解読する「主題」なども、この次元で機能している。それにたいして、ソシュールの「主題語」は、逆説的にも完全な字義性・冗長性ゆえに、かえってテキストの心理的・情動的意味作用へと展開しない。この原因は、アナグラムの構想においてソシュールが考慮している意味と音が、あくまでも「語」＝シーニュの次元、すなわちラングの次元におけるシニフィエ／シニフィアンにとどまっており、それらが詩ディスクールへ実現される局面での意味と音が問われていないことに遡る。言い換えれば、ソシュールのアナグラムは、シーニュの顕在化に介入し、これを組織する詩法として、すなわち表現されるテキストの水準と潜在的なラングの水準を積極的に関連づける詩法として設定されながら、それにもかかわらず表現へ結びつく積極的な力線を欠いているのである。そのせいで、ソシュールが読み取る「語」＝シーニュは、テキストの「主題」と有機的に結びつくことができない。アナグラムのパラドックスの真の原因は、ソシュールにおける確率論的配慮の不足ではなく、シーニュの顕在化の機構にかんする論理の欠落に求められるのだ。

6

ソシュールがもう少し注意深くあったなら、彼の詩学的研究は挫折せず、何かもっと実在的な詩法を発見していたかもしれない、などと仮想してみることは、無意味だろう。なぜなら、シーニュから表現への転換の問題は、ソシュールの思考の限界において解きえない謎を構成していたと考えるべきだからである。この問題をもっとも鋭く問うたソシュールの言葉は、まさに詩法関係のノートそのもののなか、ヴェーダ詩篇の分析に割かれたノートのひとつの最後の頁に記されている¹¹⁾。

ラングはディスクールを目標としてしか創られていないが、何がラングからディスクールを切り離すのだろうか。あるいは、何があの瞬間にラングがディスクールとしての活動にはいると言わせるのだろうか。

様々な概念はそこに、ラングのなかに用意されている（つまり言語的形態を纏っている）。「牛」「湖」「空」「赤い」「悲しい」「五」「割る」「見る」というように。どのような瞬間、あるいはどのような操作によって、これらのあいだに立てられるどのような働きによって、どのような条件によって、これらの概念はディスクールを形成するのだろうか。

これらの語の連なりは、それが喚起する観念においてどれほど豊かであろうと、ある個人にたいして、別の個人がそれを発声することでその人に何かを意味することを欲しているのだと、告げることは決してないだろう。ラングのなかに配備されている〔無数の（削除）〕辞項を用いて人が何かを意味することを欲しているという観念を私たちがいなくには、何が必要なのだろうか。これはディスクールとは何かを〔ラングという単一な観念との対立で（削除）〕知ろうとすることと同じ問題であり、一見すれば答えは単純である。初歩的にであろうと、私たちの知らないやり方でだろうと、ディスクールとは、言語的形態を纏って現れてくる概念のふたつのあいだに絆を確定することに存する。そのときラングが行うのは、思考の意味作用が生じるために互いに関係づけられることを待っている孤立した概念を、あらかじめ在らしめておくことにすぎない。

(Ms. fr. 3961/10, MSM, p. 14)

ラングの水準における「概念」すなわちシニフィエは、人が何事かを表現しようとする「ディスクール」における「意味」、「思考の意味作用」とは本質的に異なる。これは、ソシュールのシーニュの本性から必然的に出てくる考えである。ソシュールは、シーニュをシニフィアンとシニフィエの二重体としてとらえることによって、シーニュの体系としてのラングをパロールから決定的に切り離しえたが、この切断は、語ることの成立にかんする難問をもたらす。シニフィエを内包するシーニュは、潜在的次元において完結しており、おのれのうちに表現へ上昇する契機を含んでおらず、「ディスクール」へ転換されるのを待つことができるだけである。「デ

ィスクール」が生まれるためには、ラングとはべつの本性をもった何ものかがラングに介入しなければならない。けれどもソシュールにとって、それはラングを使用する主体といった類いのものではありえない。主体がしかるべき諸シーニュをしかるべく配列することができたとしても、その意味は、表出作用をともしないラングの水準の意味にとどまるしかない。それに、そもそもラングは、顕在的な主体の行為の対象になりえない潜在的な存在である。したがって、この何ものかは、ラングと異なった潜在的な働きでなければならないことになろう。ソシュールは、その不可欠さを認識しながら、それが自分にとって未知の存在であることを確認するにとどまっている。もっとも、この問題は、ソシュールにして初めて提出しえた根柢的な問題であり、その後も特に顧られることなく、いまだにほとんど手がつけられないまま残されている問題である。ディスクールのみを扱おうとする言語学はもとより、シーニュの二重性を解体した構造主義や記号論においては、ディスクールへのラングの転換が謎としての深さをもって見えてくることはありえないからである。

ソシュールのアナグラム研究を中断に追い込んだものは、ラングと「ディスクール」のあいだに彼が見出した深淵と深部において通底している。主題語という潜在的な語を基盤に、孤立した諸記号を決定的な結合形態に転換し、自律的ディスクールを構成しようとするのがアナグラムである。しかし、そこにはラングから「ディスクール」への質的転換に関わる論理がないため、要となるはずの主題語は深淵に吸いこまれ、「何かを意味することを欲する」瞬間に到達できないまま、孤立した語として永遠の待機を堪え忍ばなければならない。ディスクールの活動に参入することなく、ひたすらソシュールの耳の内部において反響しつづけなければならないのだ。

ディスクールの問題という観点から、アナグラム関係書簡の分量についても触れておく。ソシュールがメイエにたいし詩法の解説を披露し、ときに意見を尋ねる手紙は、今日までに公表されている範囲では、19 通中 5 通、バイイにたいしては、35 通中 14 通にのぼる。彼の「書簡恐怖症」ばかりでなく、一般言語学の方面で自分の考えの成否を問う手紙が皆無に近いことを考えると、注目すべき分量といえるが、アナグラムの性質から出来た事態のように思われる。ラングの研究が、その周辺でしかディスクールの問題に抵触しないと異なり、詩の成立を考究するこの領域では、不可避免的にラングとディスクールの関係の問題が入ってくる。けれどもそ

れは、ソシユールにとって謎であり、二つの水準のあいだに深淵を開く。つまるところ、だからこそ、ソシユールはアナグラムにかんして、対話者のディスクールによってアナグラムが肯定（あるいは否定）されること、すなわち他者のディスクールの力がこの深淵を埋めることを、虚しく求めずにいられなかったのではないだろうか。しかし、アナグラムとはディスクールの意味作用を内側から解体する怪物であり、彼の手紙は、本質的に相手のディスクールを失調させてしまう性質を秘めている。とすれば、パスコリジしんの思惑がなんであれ、詩人が答えなかったことは、的確な反応であり、またこの出来事をもってソシユールが研究をきっぱり中断したことも、そうであった（アナグラム研究はどこまでもアナグラムの本性に忠実に展開し終息した）ということになる。

いまや私たちは、ソシユールのアナグラム研究を、彼のラングにかんする思索と二重に関連させて位置づけることができる。第一に、潜在的な記号の探求という側面において。一般言語学がディスクールの集合体からシーニュの体系を抽出する試みであったとすれば、アナグラム研究は、文学的ディスクールのなかから、これを組織する「基盤」となるシーニュを抽出する試みである。そして第二に、ラングの論理の限界点の露呈という側面において。ソシユールは、表現からシーニュを切り離す仕事を通して、表現をシーニュに送り返す仕事を通して、シーニュとディスクールのあいだの深淵と出会っている。＜アナグラムは存在するのか＞という問いは、＜シーニュをディスクールへ転換するのは何か＞という問いと、問い方の角度を違えながらも交叉したのである。この出来事は、ソシユール言語学をモデルにしたり応用したと見なされてきた知を根柢から揺るがすばかりでなく、詩とシーニュのあいだの絆を思考することが、記号的潜在性と非記号的潜在性とのあいだの未知の論理の探究によってしか可能でないということを陰画のように示唆すると思われるが、その考察のためには舞台を新たに設定しなおさなければなるまい。

凡 例

Ms. fr. 3963/3 = フランス語手稿・断章番号 3963, カイエ 3 (頁数はユデルが振ったと思われる番号に拠る)

MSM= Jean Starobinski, *Les mots sous les mots. Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Gallimard, 1971

CFS= *Cahiers Ferdinand de Saussure*, Droz

注

- 1) *Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, in *Mercure de France*, février 1964.
Les mots sous les mots, in *To honor Roman Jakobson*, La Haye, Mouton, 1967.
Le texte dans le texte, in *Tel Quel* 37, 1969.
Le nom caché, in *L'analyse du langage théologique. Le nom de Dieu*, Aubier, 1969.
La puissance d'Aphrodite et le mensonge des coulisses. Ferdinand de Saussure lecteur de Lucrèce, in *Change* 6, 1970.
上記の六論文を加筆・再編した著書, *Les mots sous les mots. Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Gallimard, 1971.
- 2) 代表的な論文として次のようなものが挙げられる。
Julia Kristeva, *Pour une sémiologie des paragrammes*, in *Σημειωτική. Recherches pour une sémanalyse*, Seuil, 1969.
Roman Jakobson, *La première lettre de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet sur les anagrammes*, in *L'Homme* 11, 1971(*Questions de poétique*, Seuil, 1973).
Louis-Jean Calvet, *Pour et contre Saussure. Vers une linguistique sociale*, Payot, 1975.
丸山圭三郎『ソシュールの思想』, 岩波書店, 1981 年。
スタロバンスキーのアナグラム評価は, 彼の諸論文がソシュールのアナグラムの紹介を主眼としたものであるうえに, アナグラムの実在性にかんしても一定の留保を設けていることもあり, 要約しがたいが, それでもアナグラムの, 「あらゆるテキストは含み, 含まれる。あらゆるテキストは能産的所産である」というテキスト論と関係づけている点 (*Tel Quel* 37, p.35) で, クリステヴァの立論への道を開いたと言えよう。彼女は, 構造主義の静態性と非歴史性を乗り越えるフォルマリズムの概念の提示をもくろむ上記論文において, 「パラグラム」(ソシュールによるアナグラムの異称) に, 「文法, 統辞法, 意味論の諸法則」にたいする侵犯 (p. 183), 「非線的な」網目 (p. 184) を見て, それを「フロイトが無意識の痕跡の上に把握した「作業」と関連づけている (p. 203)。ここでは「パラグラム」という語にほとんど「詩的言語」一般に等しい意味が担わされており, ソシュールのアナグラムが分析の具体的対象となっていないのだが, クリステヴァが提示した単純な見取り図はその後のアナグラム論の基本的方向を決定づけたように思われる。ヤコブソンは, ソシュールの研究を, 「詩的言語の, 本質的に, またさらに付加えずにはいられないのだが, 普遍的にポリフォニックかつポリセミックな本性を白日のもとにさらし,」「合理主義的芸術」という流布した概念に挑戦した」ものとして絶賛した (op. cit., p. 200)。さらに

カルヴェは、クリステヴァとヤコブソンのアナグラム評価を受け継ぎながら、『講義』のソシユール（「固定しており、諸言語の事象をその多様性において考慮することができない構造主義言語学の基礎」）対アナグラムのソシユール（「具体的な言語事象に結びついたソシユール、ラングではなくパロールのソシユール」）という対立構図を明確に打ち出した（op. cit., p. 11）。丸山は、『ソシユールの思想』でアナグラムの無意識性を強調し、それを「言語以前の欲動の世界（自然）と「構成された構造」（文化）の間を絶えず上向・下向運動を繰り返しながら、クリステヴァの言うル・セミオティックの再活性化によってル・サンボリークな体系の再布置化を可能にさせる」デスクール活動の一種（117 頁）と位置づけ、日本の研究者のアナグラム理解に決定的な影響を与えた。

- 3) アメリカ文献学会からホイットニー追悼文を依頼され、1894 年 11 月頃起草された、未完の草稿。『学習院大学文学部研究年報』第 30 号（1984）に小松英輔氏による掘り起こしが掲載されている。
- 4) CFS44, 1990-1991, p. 37-71, et CFS48, 1994-1995, p. 91-134.
- 5) 伝説によればローマはサトゥルヌス神により創設された。サトゥルヌス詩という呼称は、「最古のラテン詩」という意味を込めて後世に定められたものである。
- 6) アヴェには、サトゥルヌス詩にかんする著作、*DE SATURNIO LATINORUM VERSU* (Paris, 1880) がある。ソシユールがアヴェの研究を参照にアナグラムを研究したことはまちがいない。1906 年 12 月 6 日付メイ宛書簡には、「それから私はサトゥルヌス詩を深く検討し、これにかんしてルイ・アヴェの結論とはまったく異なった結論に達しています」(Jakobson, ib., p. 191) と書かれている。
- 7) 音韻の偶数回の反復について多くが語られた後、手紙の末尾に次のように記されている、「ホメロスの詩のテキスト全体（……）は、秘められた法則に拠っており、そこでは決まった数の母音と子音の反復が、＜見出し語 (Stichwort)＞＜主題語＞に従い、見事で完全な正確さをもって詩句から詩句へと観察される。」さらに、署名の後、「ホメロスのテキスト全体は広大で連続的なアナグラムにほかならない（……）と前もって言うことができる」と書き添えられている（CFS44, p. 52-53）。
- 8) はやくも、1906 年 8 月 7 日付バイ宛書簡にこう読める、「こうした多様体のうちに秩序をうち立てる証明を期待しているのに、この件はたんなる夢想ということになるかもしれませんので、あなたに覚書きの数葉をお送りしたいと思います。幻が問題になっているのか、現実が問題となっているのか判断して

ください」(CFS48, p. 116)。

- 9) 丸山圭三郎『フェティシズムと快楽』, 紀伊国屋書店, 1986 年156-158 頁。
- 10) アナグラム研究にやや先行すると推測されているニーベルンゲンにかんする手稿においても, ソシュールは固有名詞を一種の「シーニュ」として論じるさい, <symbole> という用語に訴えている (Ms. fr. 3958/4, MSM, p. 15-16)。この符合は, 「主題語」が「シーニュ」のステイタスを持っていたことを傍証してはいないだろうか。
- 11) 全 40 頁のノートの裏表紙の前の頁全体を使ってこの覚書きは記されている。最初の頁から覚書きの直前の頁 (ゴデルが付したと思われる整理番号に従えば 20 頁) までは, すべてリグ・ヴェーダの詩篇の, アナグラムではなく音韻数を示す表に割かれている。覚書きには, それらの部分と同様のセピア・インクが使用されているが, 音韻分析との連関は稀薄であり, その注釈とは考えがたい。もっともありえそうな仮定は, 手元にあったノートの余っていた頁を利用したとすることである (各音韻表は見開き二頁にわたって書かれているので, 最終頁は余る可能性が高い)。だとしても, このことは, ラングの限界とディスクールの成立をめぐる問いがソシュールの思索に立ち現れたのが, 詩法の問題に取り組んでいた時期と重なることを示唆することになる。

* ソシュールのアナグラム研究ノートの読解は, 筆者がジュネーヴ大学文学部一般言語学科留学中 (1991-1992) ジュネーヴ市民・大学図書館で行った手原調査に基づきながら, 学習院大学が所蔵する手稿コピーを参照することで補った。閲覧にさいしての同大学・小松英輔教授の御厚意に深く謝意を表する。